

あかあま

わが町、わが店、この道一筋。出逢いとコミュニケーション あかい新聞店ホームページ <http://www.akai-shinbunten.net> <発行所>あかい新聞店 武豊店/知多郡武豊町字金下37番地 ☎<0569>72-0356 常滑店/常滑市市場町4丁目167番地 ☎<0569>35-2861

総合印刷物企画・プランニング・デザイン・印刷・加工・オンデマンドデジタル印刷・デジタルメディア企画制作



半田中央印刷株式会社

〒475-0032 半田市潮干町1番地の21
TEL <0569> 29-2525 (代) FAX <0569> 29-4500
E-mail: main@handa-cp.co.jp http://www.handa-cp.co.jp

企画・制作：株式会社 新聞ビル

元氣のでてくる“ことばたち”

177

村上信夫



Nobuo Murakami

丸く腫れるとか、ステロイドの副作用はいろいろあった。高校の卒業式も出るどころがかわず、20代はほとんど自宅から出られなかった。近所で買いたが、基

す。伝統芸や武芸の中に『守破離（しゅはり）』という言葉があるんです。『守る、破る、離れる』、これは実は病気にも当てはまる。つまり最初は自分の病気にときちんと向き合っ、お医者さんの話を聞いて自分でも調べて、病気に対してきちっと守っている時期がある。ある程度病気が向き合えるようになっていってから僕が何をしたらか

たという感じですね。病は気からというが、気にしなくなった時点で、病気の方もそろそろ嫌になって離れていったのかもしれない。小猫さんは、35歳という年齢にしては、すごく腹が据わって度胸があるように思える。ご本人は、たぶん今の性格の根本になっている部分というのは、間違いなく闘病時代にできてきたものだと思います。一方で病気をしていると、内向的というか、気持ち

が内側に向いていくので、ある程度病気が離れていった時に、内側に向いていたベクトルを外に向けていくのが大変でした」と振り返る。

守って破って離れて

動物ものまね 江戸家小猫さん

高校3年生のアクセント
明治から続く動物ものまね・江戸家の跡取り、二代目江戸家小猫さん。祖父が三代目の江戸家猫八さん、父が四代目の江戸家猫八さん。小猫さんは、1977年生まれ。江戸家に生まれて、見よう見真似でもものまねを覚えて、7歳のころには親子3代で舞台上に立つて、自然な流れで後を継ぐと思われていた。

本的に社会復帰するような体力はなかった。ずっと自宅療養だった。

だが、1995年、高校3年生の時にアクセントに見舞われる。小学校の時にはサッカーを、高校の時はラグビーと、きわめて健康体のスポーツ少年だったが、突如ネフローゼに罹る。毎朝、腫が腫れることに気づき、病院で診てもらったらネフローゼと診断された。塩分制限をしながら、投薬治療を2か月間ほど続けた。

スポーツ少年だった小猫さんが、20代は家でじっとしていなければならぬ。よく我慢出来たと思う。よく自暴自棄にならなかつたと思う。そのことを聞くと、彼は冷静にこう答えた。「一気にどん底まで行ったわけではない。最初は2か月で退院できるというところから、だんだんに坂を転がり落ちるように来たので、自分のメンタルコントロールをしやすかつたんです。アウトドアなことも好きなんです。絵を描くのが大好きなので、入院中は毎日のように絵を描きためてました」

という、今度は少しずつ、治療法の中や自分の生活リズムの中で破っていくことなんでしょう。それで、うまく破れて自分なりの道ができてくると、最終的には病気がからど離れていこうかと、そういう段階に入ってきたと思うんです。まったく見事なばかりの分析だ。

2か月で退院の見込みだったが、なかなか治療効果が上がらなかつた。良くなって薬の量を減らすとすぐリバウンドしてしまつた。何度も再発して、のべ1年、入院を繰り返した。強い薬を使うと効き目があつたが、その分、副作用もあつた。一番ひどいのは骨粗鬆症。骨がスカスカになり、同時に筋力も低下した。転んだわけではないのに、重力の影響で背骨の圧迫骨折で、身長が6〜7cm縮んだ。目の白内障で手術もした。ムーンフェイスといって顔が

できてしまうというのは、すごい精神力の強さだ。とても真似が出来ない。振り返ってみてがんばりすぎたということはないかと聞くと、「病気が向き合つていた時は、ちよつとした数値の変化にも過敏になり、ちよつとがんばりすぎていたかなと思いま

そういう風に病気が次第に離れていくことで、病状もよくなつていった。「だんだん自分がほかのことで忙しくなつてくると、病気を忘れる時間が増えていって



俳画/イネ・セイミ

■村上信夫プロフィール

2001年から11年に渡り、『ラジオビタミン』や『鎌田實いのちの対話』など、NHKラジオの「声」として活躍。現在は、全国を回り「嬉しい言葉の種まき」(毎週日曜10:00~)、月刊『清流』連載対談〜ときめきトークなどで、新たな境地を開いている。大阪で『ことば磨き塾』主宰。1953年、京都生まれ。元NHKエグゼクティブアナウンサー。これまで、『おはよう日本』『ニュース7』『育児カレンダー』などを担当。著書に『嬉しいことばの種まき』『ことばのビタミン』(近代文芸社)『ラジオが好き!』(海竜社)など。趣味、将棋(二段)。 <http://murakaminobuo.com>



好評発売中

イネ・セイミプロフィール

フルート奏者として活躍中。俳画家。絵画を幼より日展画家の(故)川村行雄氏に師事。俳画を華道彩生会家元(故)村松一平氏に師事。俳画の描法をもとに、少女猫等を独自のやさしいタッチで描いている。個展多数。



俳画教室開講中

常滑屋
とき 月二回 第二・第四金曜日
午後一時〜三時
会費 一回 二、二五〇円(三ヶ月分前納制)
問合せ ☎〇五六九(三三)〇四七〇

インディアンフルート教室

何か始めたいと思ってる貴女へ、数年後、素敵にフルートを奏でる姿がそこにあります。楽しく個人レッスン致します。
講師 イネ・セイミ (フルート奏者 指導歴30年) 1レッスン・1時間5,000円(テキスト代付) 申込み ☎0569-89-7127 お問い合わせ seimine@oasis.ocn.ne.jp

三代目猫八を継ぐということについては祖父や父も諦めかけていた。本人も諦めかけていた。だが、2009年、父が猫八を襲名して、小猫の名跡が空いた。「小猫の

スペースが空いて、不思議なもので、ここに行くのは自分しかないというような気持ちが強くなりましたね。」

ひそかに特訓をして、お家芸の鶯を、突然お父さんの前でやってみせた。時は、2009年6月、所は群馬県の法師温泉。その時、父は何も言わなかつた。

嬉しかったのは、その夜のこと。「二人で温泉に入りながら、同じ方向を向いて浸かっていたんです。父が四代目を襲名して全国で舞台をやるのが決まっていたんです。そこへ一緒に出てみようか」と言われた。父からバトンが渡された。こうして2011年3月に、二代目小猫を襲名した。

祖父は、88歳になつたら江戸家八十八を名乗ると言っていたが、叶わなかつた。今度は、父が米寿の年に八十八を名乗りたいと言っている。その年に小猫さんは還暦になる。祖父と父、小猫さんの年回りがちょうど同じなのだ。祖父が叶わなかつた夢を父と実現したいと思つている。父の八十八襲名時に、五代目江戸家猫八を襲名したいと思つている。

新シリーズ ヒューマンライフ

『新・現代家庭考』 就職

—自分ドラマつくろう— (27) 岡田 清治

娘の就職2

「過去のことより、今日そして明日のことが大事だ」と言って真三はそれ以上の追及をさせない。

仕事をやめて夫婦といる時間が長くなる、これまで気分がなかったことが見えてくる。

「女性というものは、いつまでも過去にこだわる。それも長年の恨み辛みを繰り返す。真三も耳にタコができるほど聞かされることになった。かつてサムセット・モームの『月と6ペンス』を読んだとき、ストーリーは忘れてしまったが、女は6ペンス、つまりカネ(現実)にこだわるが、男は月、それは夢を持ち続ける動物だと解釈してきた。年寄りで夫婦も同じことで、妻は過去、夫は未来を見つめて生きようとしている。夢が破れた時は死ぬ時だと思っただけだ。その点、女はどこまで行っても現実的である。もちろん例外はあるが。」

「今も東京におられるのですか」

「彼は、るり子と結婚する前からの付き合いだから、ずいぶんなる」

「そんな長いですか。よほど気が合ったのですか」

「今はアメリカのワシントンDCからクルマで一時間ほどの郊外にいます。東京とアメリカを行き来している。このところ毎朝のようにスカイプ(sky)を使ってビデオ電話で話している。たぶん今は東京にいると思っ」

「朝からパソコンの前に座って何をやっているのかと思っいたら、その人と話していたのですわ」

「どくにワシントンにいた時に回数が多いのは、彼を通じてアメリカ社会の様子がわかるのだよ」

「やはり彼のように世界的な視野、とくにイスラームの世界から見ると、いままでわからなかったことが見えてくるので楽し」

「そうでしょうね」

「われわれは新聞やテレビを通じて情報を得ている。それらは、とくに欧米のニュースの多くがアメリカ発の情報なのだ」

「結局、アメリカという国が巨大な国家だということでしょうね」

「その通りだ。ソ連が崩壊して次に中国が台頭してきているが、少なくとも今世紀前半はアメリカの時代だろうね」

「日本のメディアがアメリカ情報に頼るのわかりますね」

「だけど、世界人口の約25%はムスリム(イスラーム教徒)だよ。インドでも約15%が南北インド中心に広がっている。パキスタンは96.4%、バングラデシュ90.4%がイスラームだよ。ヒンズー教の国インドへ行くにしてもイスラームの世界を理解していないといけないと思っ」

「日本人がイスラームになじみがない上に、テロのレッテルがはられていますね」

「るり子はよく疑問を發する。」

「そうだね。日本人は長いひげを生やした残酷で戦闘的な宗教的過激派でテロをやらかない男たちを連想するだろうが、彼に言わせると、それらの多くは欧米のマスコミが誤ったイメージを増幅して伝えていると言っ。とくにアメリカの映画でムスリムを悪者に描くものが多いと思うだ」

「私たち日本人は石油を中東・イスラーム世界に依存しながら、イスラームの世界を正しく理解していないようですね」

「今日にもパキスタンの友人にスカイプで予定を聞いてみる」

「だったら、何も東京に行かなくてもスカイプですか、それで聞けばいいのではな」

「やはり会ってじっくり聞きたいのだよ」

「あなたが会いたいということですね」

「ま、そんなところだ」

「真三はガイジンと話をしてから、舞に電話してドライブにでも誘っ」

「じつり話を聞くことにしようと考えた。す、机に向けて計画のメモをとった。その予定表を見ながら裕美に電話を入れ、来週末にも舞を名古屋駅に迎えに行くこと伝えた。」



ケーブタウン全景(著者撮影)

裕美は「昨日はありがとうございました」と礼を言っ後、舞に伝えて電話をせると返事をした。

真三は舞から電話がある前に、パキスタンの友人にコンタクトをとろうと、スカイプで呼び出した。ワシントンにいたなら、一時間の時差だから、こちらが朝の九時なら向こうは午後八時頃だ。まだ寝る前である。外出していたら仕方ない。

パソコンでスカイプを開き、友人のアドレスにアクセスした。運よく「オンライン」と表示される。この状態ならつながる。

「もしもし、こちら善です」

「ああ、善さん、おはようございます」

「おはようございます。というところは、東京にいますね」

「そう。そう、予定を変更してあと二ヶ月ほどいることにしました」

「そうか。では今週末、東京で会えるかな」

「もちろん。善さんと会えるなら喜んで時間をあげますよ」

「そうか。では今週末の金曜日午前10時、新宿のTホテルロビーでどうだろうか。昼食を食べながら話をしたい」

「よかった。待っています」

真三は再びペンダの椅子に戻っ、るり子に電話の報告をした。

海からの風も春の兆しを感じさせるように柔らかい。

「裕美さんには来週末、舞さんをドライブに誘っ伝えた。ガイジンの友人とは金曜日、東京で会うことにした」

「忙しいですね。どうしてガイジンと呼ぶのです」

「彼の名前はムハマッド・サリム・シヤキキと云うが、ムハマッドはムスリム、つまりイスラーム名、サリムは一般名、シヤキキとはファミリー名だと思っ、言いくいのだ。彼は『ガイジンの見た日本』という本を書いているので、それで俺はミスター・ガイジンとか単にガイジンと呼んでいる。彼もそれでいいと言っのだ」

「そうですか。面白そうな本ですね。真三さんは今もその本を持っているの」

「本棚にあると思っ、後で探しておく」

「そのガイジンさん、何をされています」

「日本の企業に勤めながら執筆業もやる、いわば二束のワラジを履いていた。ところがあまり名前が知られてくると、会社から外部での活動を煙たがり注意された。それでも講演や執筆を休日などを利用して細々と続けていたが、ようやくこのほど定年退職となって自由の身になったので本格的に活動しようと考えているそうだ」

「日本語がお上手なですね」

「俺は何人も外国の知人がいるが、彼ほど話せてしかも日本人と同程度以上に書ける外人は見ることがないね」

「そうなの」

「るり子も知っている大学教授のO氏がいるだろう。彼はアメリカ人だけれど、牧師だった父親の代から日本とアメリカに住みながらアメリカでは日本史、日本ではアメリカ史を教えていたが、ある意味ええかげんだね」

「そうですか。その教授は日本語を書けたり話せたりできるの」

「いや日本語をうまく書けない。話術もいま二つなのだ。ところがガイジンの方はすごいのだが、アジア人ということで白人に比較してハンディがあったと思っ」

「O教授は大学で教えていたのですよ」

「日本語はうまくなかったが、ただ本を読めたのだからと思う」

「ガイジンと呼ぶ方は読み書き話す、すべて日本人と同じくらいできるの」

「そうだ。日本語、英語、ウルドゥー語(パキスタンの国語、インド亜大陸でもよく使われている)、スペイン語を話せ、いまアラビア語を勉強している語学の天才だ。しかもだよ、日本の古典も読んでるので日本人の並み以上だね」

「すごいですね」

「彼は日本語の原稿や手紙の添削を俺に頼んでくるから、彼の能力はわかる」

「手紙ですか」

「そうだよ。それだけ信頼されているのだよ」

「彼に日本語の美しさを教えられたこともあった。」

日本語は語彙の数では世界有数の言語である。最近、その日本語が汚くなったと感じるというのだ。とくに若者言葉や新語、当世流行ことばなど、ほとんどわからない。若者言葉はいつの時代もあったし世界中にある。

「愛しあうそのときに、由紀さおりがニューヨークで日本語で歌った『夜明けのスキット』にアメリカ人は酔いしれた。日本語が美しい」と意味不明でもそう感じるそうだ。

日本語に精通している彼は真三の好きな島崎藤村の詩初恋に感動したとも話した。

まだあげ初めし前髪の林檎のもとに見えしとき
花あきみと思ひけり

この詩を正確に感情を入れて翻訳することは難しいと話したことがある。彼は日本語には言葉が宿る(こころ)と感心したと話した。

「そのガイジンさん、日本人以上に感受性がありますね」

「彼はパキスタン人だけれど、自分は、キスボジン(両国をあわせた国)になっっている言っのだ」

「どういうキスボジンの方ですか」

「覚えていて話そう」

「彼は確か一九四三年(昭和十八年)インドのウタル・プラデーシュ県(Uttar Pradesh)北国、バレーリ市(Bareilly)に生まれた。一九四七年、インド、パキスタンが分離独立(正確には八月十四日にパキスタン、十五日にインド)つまりパキスタンの独立が一日早くと彼は語る。」

だからインドで生まれ現パキスタン(パキスタン回教共和国)のカラチ育ちだ。真三より二歳年上になるが、国が独立するという大変な時期だったので正確かどうかわからない。カラチはパキスタンの南部に位置する最大の都市である。彼が育った頃は西パキスタンと呼ばれていた。

現在のインドを中心とする南アジア地域は、知っていると思うが、イギリスが十七世紀ごろから植民地化して支配した。だから彼からいっつも植民地化された国民の屈辱について話の端々に出るが、イギリスのやり方は巧妙で現地人にうまく受け入れさせた。インドで随分受けつない残酷なことをしたが、インド人がイギリスやアメリカに留学することを今も誇りに思っっている。

一方、われわれ日本人は朝鮮や台湾を植民地化したことばあっても植民地化されたことはない。日本の現地のやり方(言葉、名前の変更を強いたことなど)は欧米人に比べて下手で、とくに韓国は同じアジアの隣国だけに日本人に対する恨みはパキスタンのそれよりも複雑だと感じるね。



プロフィール

著者：岡田清治おかだせいじ

一九四二年生まれ ジャーナリスト

(編集)ロダクション・NET108代表

著書に『高野山開創二百年 いっぱ

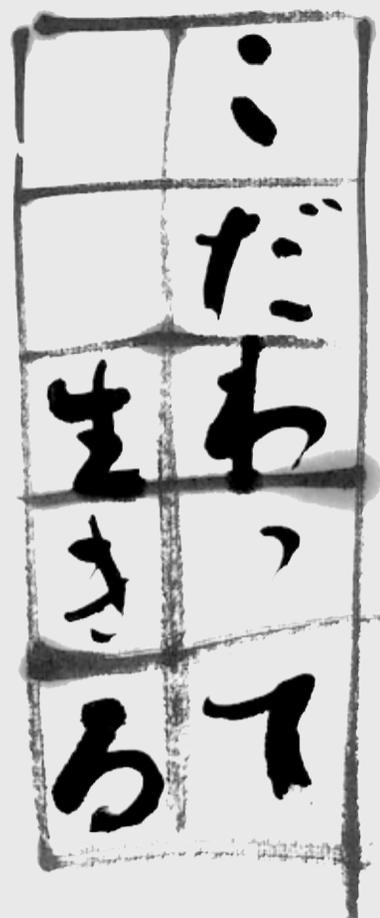
んさん行状記』『心の遺言』『あなた

は社員の全能力を引き出せます

か』『リヨンで見た虹』など多数

※この物語に対する読者の方々のコメント、体験談を左記のFAXかメールでお寄せください。今回は「就職」「日本のゆくえ」「結婚」「夫婦」についてです。物語が進行する中で織り込むことを試み、一緒に考えます。
FAX：0569-34-7971
メール：takamisuu@akah-shinbun.net

絵手紙集



絵文 樫山善久

返文 小林玲子

樫山善久

昭和十一年碧南市で生まれる。丸栄陶業株式会社代表取締役。碧南商工会議所会頭。愛知県陶器瓦工業組合理事長。全国陶器瓦工業組合連合会理事長などを歴任。平成十三年藍綬褒章受賞。平成二十二年旭日小授章受賞。丸栄陶業株式会社取締役会長 現在に至る。京都造形芸術大学・通信教育部芸術学部美術科・洋画コース三年次在学中。

小林玲子

碧南市に育つ。西尾市在住。共著「西尾の民話」童話「サケの子ピッチ」随筆「海辺のそよ風」(中経コラム「閑人帳」より) ミュージカル脚本 「みぐりちゃんのおうち」ほか



百日紅
凛と咲きたる
紅と白

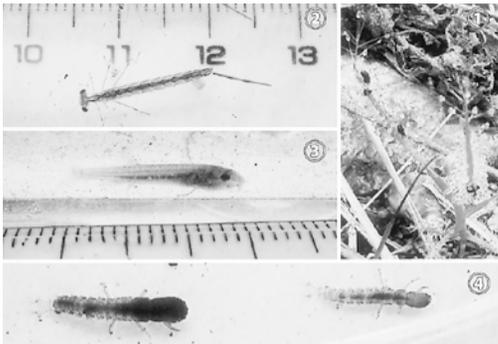
日着中お見舞い申し上げます。
去る七月三日樫山善久叙勲祝賀会にやむを得ずお遅い
くお参りました。皆林チからお祝いの言葉を頂戴しまして
私は生涯最高の日になりました。この機会としまして頂き
ましたのも皆様のこのお祝いとご支援があつたことでありました。
心よりお礼申し上げます。私の冥途頂は「くだわり」です
これからの人生も今までの生きたり変えることが出来ないと
思っています。本年三月末幸にして社長を後継者に譲りました
私たちの世代は昭和の戦中戦後から現代まで波瀾万丈の
人生を精一杯生きてまいりました。この貴重な体験を次世代の
人に伝えて行きたいと思っております。
まずは、祝賀会にご出席お礼のご挨拶まで。感謝

暑さに参って怠惰な毎日に喝を頂いたよ
うな力強い確かな描写の絵手紙を拝受し
流石流石と眺め入っております。
画も書もご人格の表われとよく解ります。
人生の新たなご出発の意志を感じます。
これからも凛々と鈴を振り鳴らす如き
生き方をされますよう奥様共々ご健勝に
てお過ごし下さいませ。
すばらしいお作を本当にありがとうございます。

知多の動植物雑記(二九八)

原 穰

先月号で記したのは、我が世の春がやって来た... 川を探索すれば、草花の若芽や、孵化したばかりと思



わが世の春が、今もなお

光り輝いている。見れば、粘液によつて捕らえられた虫が三、四匹もくつついて

美の回廊 Vol.4

水野 伊津子 「絵に魅せられて・心のままに…」

絵を見る 皆さんは年に何度くらい展覧会に行かれるでしょうか? いや〜日展くらいかな? 親戚の人が絵を描いているんで義理で行く。僕は印象派が好きだから、いい作品が来たときは必ず行くよ。

私が大好きな作家。 アメリカを代表する画家 エドワード・ホッパー (1882~1967) 彼の作品の多くは、何の変哲もないアメリカの日常風景やそこに生きる人々



「ガソリンスタンド」 夕暮れの人気のないガソリンスタンド、経営者なのか孤独感ただよう一人の老人、森は深く外界を遮断しているように見えます。

ちよつとおじやまします

常滑陶芸会会長 齋田 清さん



齋田さんの人生に彩りを加えてくれたのは焼き物だった。退職後陶



さんは小さくて、温かさが感じられる。じつと眺めていると、とある4歳の男の子を思い出した。私が出逢った男の子は、ほつぺたがぶくつとして

若竹俳壇

作品募集 毎月十日までに集めて 発行所へ

六月の海きらきらと輝けり 招き猫もわかれて行く青時雨 新築の槌音響く梅雨晴間

吉田ひろし 富田悦子 桑山撫子 藤崎ひとみ 藤井文子

無料(作は有料) *日頃の感謝込め てなまつり作は千五百円をいま。 詳しくは知多地域文化センターまでお問合せ下さい。

MIHAMA 花火大会 「ビッグバン2013」 開催日程 8月10日(土) 19:00~20:30

開演 ウェイオリン・平光真由子、テロ・高木俊彰とアノ山山子 演奏曲 愛の掬い

